

平成29年度 秋田県埋蔵文化財センター企画展第Ⅱ期パンフレット

米代川流域の古代社会

～集落・生業・墓と祭祀～



くわさき しやか ないかだい
鍬先 (釈迦内中台Ⅰ遺跡)



いくし とくち
斎串 (樋口遺跡)

会期：平成29年9月23日(土)～平成30年2月25日(日)
会場：秋田県埋蔵文化財センター特別展示室

しやか ないかだい
大館市釈迦内中台Ⅰ遺跡

秋田県埋蔵文化財センター

はじめに

秋田県埋蔵文化財センターでは、今年度「^{よねしろがわ}米代川流域の考古学」として第Ⅰ期と第Ⅱ期に分けて企画展を開催しています。このたびの第Ⅱ期は「米代川流域の古代社会」と題し、主として当センターが発掘調査を行った米代川流域やその周辺地域の古代遺跡を紹介します。これらの遺跡の多くは、日本書紀を始めとした当時の史書に「^{えみし}蝦夷」、「^{ふしゅう}俘囚」などと記されている人たちが残したものと考えられます。ここでは、集落、生業、墓と祭祀の3つのテーマから、当時の人たちの生活や社会の一端に触れていただきたいと思います。

集 落

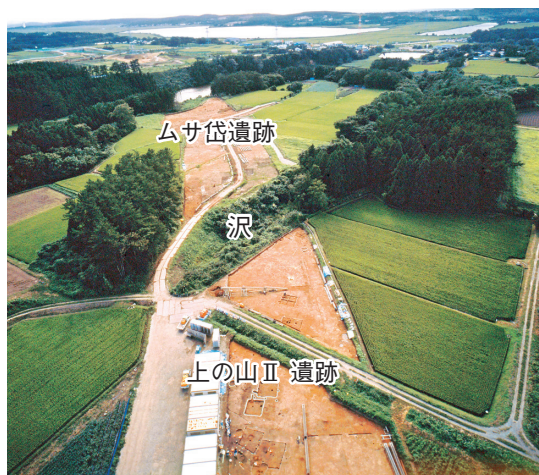
現在、米代川流域の古代遺跡は約570か所見つかっています。そのうち、奈良時代以前の遺跡はほんの数例で、ほとんどは平安時代、それも9世紀後半以降の遺跡です。これらの遺跡の調査成果のうち、まず集落について取り上げます。集落は住居を中心として構成される人々の生活の拠点です。住居や作業小屋と考えられる半地下式の^{たてあな}竪穴建物に加えて、^{ほったてばしら}掘立柱建物、墓、溝や^{いたべい}板塀などの区画施設のほか、^{かじろ}鍛冶炉、^{せいてつろ}製鉄炉といった生産施設が伴う場合もあります。実は、発掘調査によって集落全体の様子が明らかとなった例は必ずしも多くはありません。ここでは、これまでに見つかった特徴的な例からいくつか紹介します。

^{うえ やま}上の山Ⅱ遺跡・^{だい}ムサ岱遺跡

^{のしろし あさないあざうえ やま}能代市浅内字上の山・^{のしろし あさないあざ だい}能代市浅内字ムサ岱

両遺跡は米代川下流左岸、標高30m前後の浅内台地の南端に立地します。2つの遺跡の間には沢がありますが、大きくは1つの集落ととらえることができます。集落は9世紀の終わり頃に台地北西側の上の山Ⅱ遺跡で始まります。当初の竪穴建物には床面積が40㎡を超える大形のものが数棟と、床面積が20㎡前後かそれ以下の小形のものが20棟以上あります。10世紀前葉になると大形の建物はなくなり、小形の建物しか見つかありません。一方、この頃には南側のムサ岱遺跡にも竪穴建物群が出現します。ここでは大形の竪穴建物と小形の竪穴建物が併存し、上の山Ⅱ遺跡側の集落成立時期の様子と似ています。大形の住居に住むリーダー

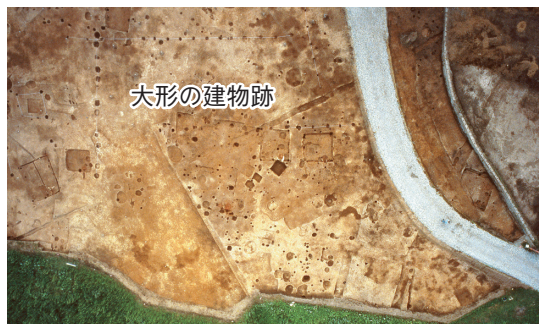
と共に人々が2度にわたって移住してきたと考えることができるかもしれません。



▲北東上空から見た上の山Ⅱ遺跡とムサ岱遺跡。中央から右上に延びる狭い沢がありますが、写真の左手前側で両遺跡はつながっています。



▲上の山Ⅱ遺跡の大形の竪穴建物跡。一辺が約9mで、床面積が約80㎡もあります。カマドは左側の壁際にありました。



▲ムサ岱遺跡の竪穴建物跡群。中央に一辺10m余り、床面積約115㎡の大形の建物跡が、周りに小形の建物跡があります。

遺跡は米代川下流左岸、幟山丘陵裾部の標高55～70mの緩斜面に立地する10世紀中頃の集落跡です。棚田状にいくつも造成された平坦地には、竪穴建物が何度か建て替えられています。集落の端を区画する板塀に加えて、平坦地を区画する板塀もあります。家族あるいは世帯ごとに住居の場所が区画されていたのでしょう。また、製鉄炉や鍛冶炉なども見つかっていて、小規模ですが、鉄や鉄器の生産も行っていました。



▲北上空から見た鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡。棚田状に造成された平坦地に竪穴建物が作られています。手前側の平坦地の縁には板塀が巡らされていました。



▲鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の竪穴建物群。何度も建て替えられた結果、大小の竪穴建物跡が重複しています。

遺跡は米代川中流左岸、標高40～45m前後の大野台地北東端部に立地する10世紀前葉の集落跡です。調査面積は800㎡に過ぎませんでしたが、重複する大小19棟もの竪穴建物跡や集落を区画する板塀の跡などが見つかりました。集落を大きく前後2時期に分けると、前半には一辺の長さが10m前後の大形の建物が多く、後半になると建物は小形化します。集落の出現時に大形の建物が作られるのが1つの特徴と言えるでしょう。また、ここでも鍛冶炉が見つかっていて、10世紀前後になると米代川流域の多くの集落で鉄器製作が始まっていたようです。

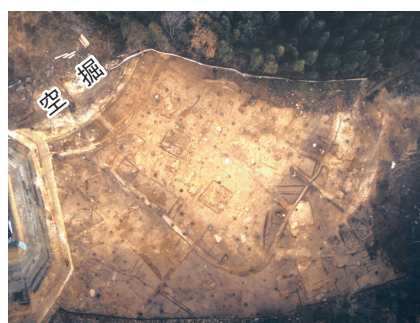


▲法泉坊沢Ⅱ遺跡の大小の竪穴建物跡群。集落の端や建物の間には板塀が巡っていました。

遺跡は法泉坊沢Ⅱ遺跡にほど近い、標高70m前後の大野台地の北東側に立地します。中世の城館跡と重複する11世紀頃の集落跡です。北向きに延びる舌状の台地のつけ根周辺を調査した結果、台地中央を東西に横断する幅1～6m、深さ1～3m前後の空堀跡3条とその南側に竪穴建物跡群などが見つかりました。堀を作って外敵の侵入を防ぐ防御性集落と考えられています。



▲南東上空から見た脇神館跡。遺跡の西、北、東の三方は急な崖になっています。



▲真上から見た脇神館跡。上が北東方向。空堀南側の平場に多数の竪穴建物跡があります。

遺跡は米代川中流右岸、釈迦内台地が2本の河川に浸食されてできた標高70m前後の段丘上に立地する10世紀前半頃の集落跡です。比較的小さな集落跡の大半を調査した結果、竪穴建物跡が18棟見つかりました。集落出現当初の建物は一辺3m前後のかなり小形のものでした。その後、建物の作られる場所が広がっていき、建物の規模は最大で一辺6m程度まで大きくなっていきます。ただし、一辺が10m近いような極端に大形の建物はなく、建物規模の違いはあまり目立ちません。また、種子類や鉄鏃などの出土品からムギなどの畑作やトチの採集のほか、狩猟も行っていたと考えられます。



▲南西上空から見た坂下Ⅱ遺跡。低い小山のようなところにあります。



▲真上から見た坂下Ⅱ遺跡。四角く見えるのが竪穴建物跡。建物群は向きが同じで隣接する数棟ごとに分かれそうです。

柴内館跡

かづの し は な わ あざにしまち あざうちうしたい あざなかやしき
鹿角市花輪字西町、字乳牛平、字中屋布

遺跡は米代川上流右岸、米代川支流の不動川沿いの標高150～160m前後の台地上に立地する10世紀前半頃の集落跡です。集落の出現期には大小の竪穴建物が営まれますが、掘立柱建物が付属するとりわけ大形の建物が1棟あります。その後は極端に大形の建物は認められませんが、大形の建物と小形の建物が併存します。有力者とそれ以外の人たちの住居が分かっていたのかもしれません。



▲一辺が9m、床面積が80㎡を超える大形の竪穴建物跡。奥側に掘立柱建物が付属します。

米代川流域集落の変遷

日本書紀を始めとした古代の史書からは、7世紀後半(飛鳥時代)に蝦夷と呼ばれる人たちが狩猟を行いながら下流域に地域社会を形成していたこと、平安時代の9世紀後半には夷俘(蝦夷・俘囚)と呼ばれる人たちが流域に複数の集落を結びつけて「村」を形成し、各集落にはリーダーがいたことなどが推測されます。これに対し、実際の発掘調査では、米代川流域で集落がまとまって発見されるのは、平安時代以降、それも9世紀後半以降のことです。当初は下流域に集落が出現し、その後、しだいに中流域、上流域へと集落が出現・増加していきます。これらの集落は基本的に台地上にありますが、近年の発見から、10世紀の初めには水田で稲作を行う集落が低地に出現していたことが明らかとなってきています。低地の集落は、西暦915年の十和田火山の噴火とそれに伴って発生した大洪水(火山泥流)によって埋没してしまいます。この大災害の復興のために、律令国家の主導のもとで下流域から中上流域へ人々の移住や鉄生産技術の導入などが盛んに行われたようです。10世紀後半から11世紀には、集落を幅数mもあるような堀で区画する、いわゆる防御性集落が出現します。この時期には秋田城などの律令国家の影響力が弱まり、清原氏に代表されるような在地の有力者が各地で出現することと関わりがあるのでしょう。

生 業

古代の生業には、水稻耕作や畑作といった農耕など衣食住に直接関わるものに加え、鉄や鉄器の生産などある種の手工業生産ととらえることができるものも存在しています。ここでは農耕や狩猟採集活動などと製鉄を代表とする生産活動を紹介します。

農耕と狩猟・漁撈

大館市片貝家ノ下遺跡^{かたかいえ した}では、西暦915年の十和田火山噴火で引き起こされた火山泥流^{かざんでいりゅう}によって埋まった水田跡が発見されています。遺跡は米代川支流の引欠川^{ひっかけがわ}沿いの低地に立地し、相対的に高い場所に住居が、より低い場所に水田がそれぞれ作られていました。米代川流域では初めて発見された古代の水田跡ですが、この頃には既に盛んに水稻耕作が行われていた律令国家側からの技術導入によって、流域の低地に開発した水田での稲作がかなり普及していたものと推定されます。しかし、十和田火山噴火に伴う火山泥流によって低地の水田は周囲の集落と共に埋没してしまいます。古代においては、その後水田が復旧されることはなかったようです。

これに対し、台地上では畑作の痕跡を認めることができます。北秋田市ハケノ下Ⅱ遺跡^{した}などでは、畑の痕跡と推定される溝跡群が発見されています。さらに、コメに加えムギ類、アワ、マメ、アサなどの栽培植物や鎌、穂摘具^{ほづみぐ}、鋤先^{くわさき}(表紙写真)などの鉄製農具、アサ糸などを紡ぐ紡錘車^{つむ ぼうすいしゃ}が出土した例もあります。台地上の畑でコメを始め、様々な作物を栽培していたようです。また、トチの出土例もあり、堅果類の採集も行っていたことも分かります。そのほかに、鉄鎌^{もり}、銛^{あみ}や釣針^{おも}、網の錘^{どすい}りの土錘の出土例もあり、狩猟や漁撈活動も盛んに行っていたことがうかがえます。



▲片貝家ノ下遺跡の火山泥流に埋まった水田跡。畦や水路跡が見つかっています。



▲ハケノ下Ⅱ遺跡の畑跡。密集する短い溝跡が、畑の畝と畝の間の溝と考えられます。



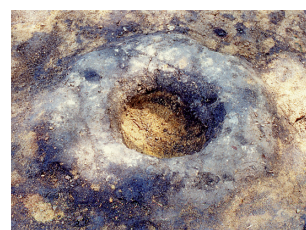
◀ 釈迦内中台Ⅰ遺跡出土の紡錘車。アサなどの繊維に縫いをかけて糸を作る道具です。長さ17cm。

鉄生産

古代の製鉄は、炭を燃料にして砂鉄を炉の中で溶かして鉄素材を生産します。米代川下流域では9世紀後葉以降、中～上流域では10世紀以降、律令国家側からの技術導入により製鉄が盛んになります。大館市釈迦内中台Ⅰ遺跡^{しゃ かないなかだい}では10世紀の集落内に製鉄炉が14基も見つかりました。集落には当初は製鉄専門の工人とそれ以外の生業に従事する人たちが共に生活していましたが、その後、専門の工人だけが住む集落に変化したようです。一方、製品に加工するための鍛冶炉は少ししか見つからないことから、遺跡では集落内で使用する鉄製品だけが製作されたと推測されます。製鉄炉で生産された鉄素材の多くは他の集落へ運ばれ、それぞれの集落で鉄製品に加工されたのでしょう。



▲釈迦内中台Ⅰ遺跡の製鉄炉。台地の縁に並びます。台地の下側には大量の鉄滓(製鉄の際に溶け出す不純物の塊)が捨てられていました。



▲ 竪穴建物床面の鍛冶炉。径約60cmの環状に粘土を盛って作っています。鉄製品は屋内で作られていました。

須恵器及び土師器生産



▲十二林遺跡の須恵器窯跡。長さ約8m、幅約1mのトンネル状です。天井の一部は崩落していました。



▲十二林遺跡の土師器焼成施設。長さ約1.4m、深さ0.15mほどの浅い穴の中で薪や藁などの燃料を上に覆って土師器を焼成しています。

専門の工人が須恵器を焼成した窯跡は、米代川流域では能代市の十二林遺跡で10世紀前葉の例が1基だけ見ついています。窯は集落がある台地の縁の急斜面をトンネル状に掘り込んで構築されています。

急斜面の下側にある焚口周辺からは失敗品となった須恵器の坏、甕、壺などの破片が大量に出土しました。須恵器の生産は、製鉄と同様に当時の律令国家側からの技術導入によって開始されたと考えられますが、生産された須恵器がどこへ供給されたかは現在のところ分かっていません。このほか、遺跡からは土師器を焼成した施設も見ついています。

交 易

蝦夷・俘囚と律令国家との関係は、史料によると、蝦夷・俘囚の人たちが国家(天皇)へ服属するための貢ぎ物を差し出し(朝貢)、国家がその見返りとして飲食や品物を与える(饗給)ものでした。これは実態としては一種の交易でした。蝦夷・俘囚からは鷲の羽、馬、鮭といった特産品が差し出され、国家からは米や布などのいわば実用品のほか、刀や帯飾りなどの所有者の権威を示す品も与えられたようです。



▲釈迦内中台Ⅰ遺跡出土の石帯。本来は律令政府の役人が身に付けた石製の帯飾りです。幅4.4cm。

墓 と 祭 祀

墓は遺骨や副葬品の発見、あるいは埋まった状況などから確認できることがあります。墓は通常集落の中で見つかります。しかし、多数の墓が集まる墓地が発見された例は乏しく、集落に住んでいた多くの人たちがどこに葬られていたかは、あまりよく分かりません。また、当時の祭祀に関わった施設も具体的にはよく分かっていません。北秋田市胡桃館遺跡といった寺院ではないかと推定される遺跡もありますが、断定できません。ここでは祭祀やまじないに使われた祭祀具として、齋串を始めとする木製祭祀具、墨書土器などを紹介します。

円形周溝墓

直径10m前後の環状に溝が巡り、中央に墓坑(墓穴)が作られた墓です。多くの場合、墓坑は後世に削られたためか残っていませんが、溝から埋葬に際して供えられた土器や刀などが出土することがあります。蝦夷の墳墓である末期古墳系統の墓で、集落もしくは村の有力者の墓だったと推測されます。能代市杉沢台遺跡からは2基の円形周溝墓が隣接して見ついています。周溝の内側に土を盛って、その盛土の中に墓坑を作ったのでしょう。



▲杉沢台遺跡の2基の円形周溝墓。先に奥の墓が、後から手前の墓が作られました。いずれも墓坑は見つかりませんでした。手前の円形周溝全体の横幅は約9mあります。

火葬墓

遺体を火葬したと考えられる墓は、能代市鴨巣^{かもす}Ⅰ・Ⅱ遺跡などで見つっています。鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡では長方形平面の土坑^{どこう}が2基並列していました。一方からは人の焼骨が出土していて、火葬した遺骨を葬った火葬墓と考えられます。また、大館市の釈迦内中台^{しゃかいなかだい}Ⅰ遺跡からは、2個並べて埋められた須恵器^{すえき}の壺が見つっています。壺の中から骨などは見つかりませんが、これらは、やはり火葬した遺骨を納めた骨蔵器^{こつぞうき}の可能性がありま。火葬は中国から伝わった仏教信仰に伴って取り入れられたと考えられ、律令国家の影響を受けた墓制とも言えるでしょう。



▲鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の火葬墓。長さ1.4m前後、幅0.7m前後の長方形の土坑2基が並びます。手前の土坑からは人の焼骨が出土しました。



▲釈迦内中台Ⅰ遺跡の2個並べて埋められた須恵器の壺。壺の中には骨は見つかりませんが、炭が入っていました。

土坑墓

土坑墓は遺体を直接墓穴に埋葬した墓です。能代市のムサ岱^{むさだい}遺跡からは鉄刀を副葬した土坑墓が見つっています。有力者だったかは特定できませんが、男性が葬られたのでしょう。大館市の狼穴Ⅳ^{おおかみあな}遺跡では竪穴建物を挟むように2基の土坑墓が見つっています。建物に住んでいた人の墓を周りに作ったのかもしれません。三種町の狐森^{きつねもり}遺跡からは北海道系の土器である擦文土器^{さつもんどき}を副葬した土坑墓が見つっています。北海道からやって来た人かその子孫の墓だったのでしょうか。



▲ムサ岱遺跡の土坑墓。刃先を切断した鉄刀が副葬されていました。



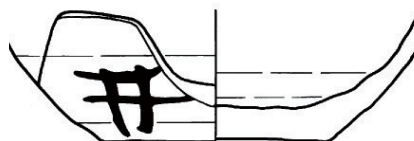
▲狐森遺跡の土坑墓。墓穴は直径1.6m前後の円形平面です。擦文土器の甕を壊して副葬したようです。



▲狼穴Ⅳ遺跡の竪穴建物跡と土坑墓。土坑墓はいずれも長さ1.7m前後の長方形平面です。

祭祀具

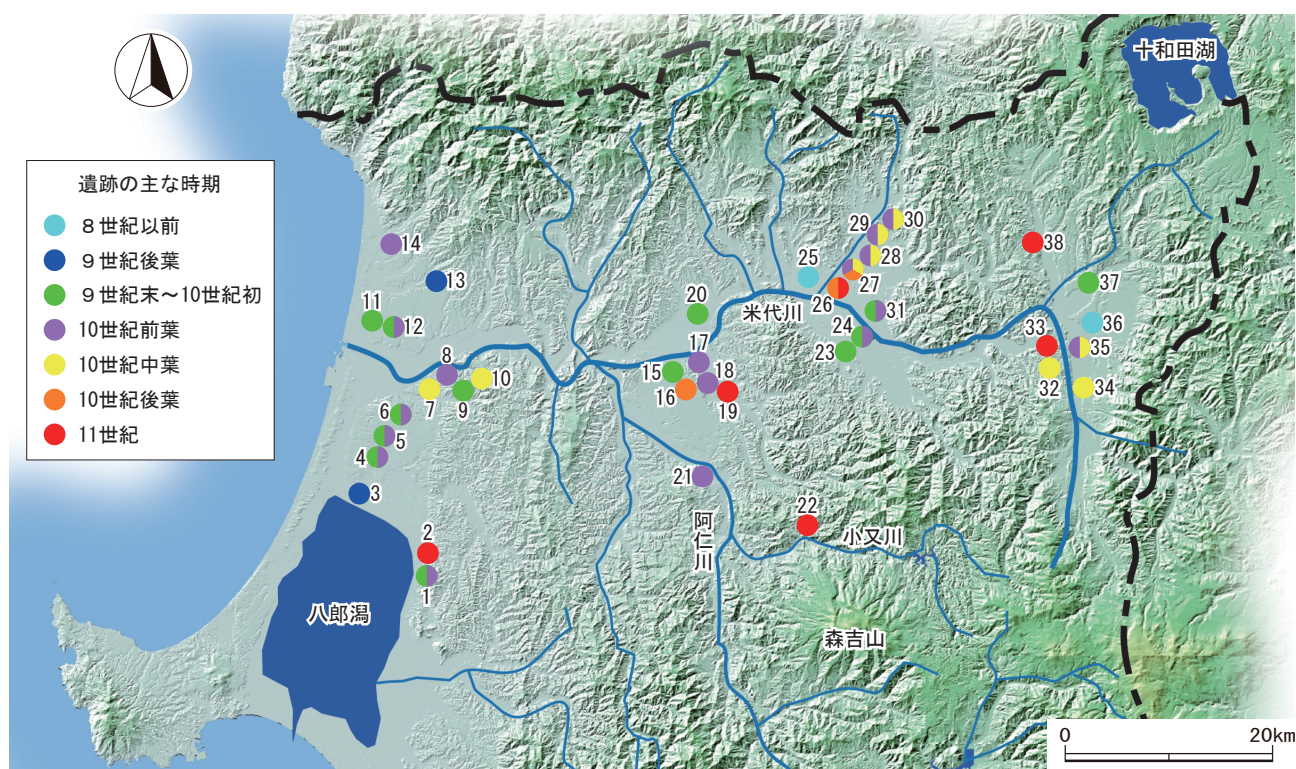
これまでに見つっている代表的な祭祀具には、能代市の樋口遺跡^{とよぐち}などで出土した斎串^{いぐし}(表紙写真)や形代^{かたしろ}があります。これらの多くは水辺や流路から見つっていて、律令国家で行われた祭祀と同様、最後に水に流して穢れを祓う祭祀の際に依り代として使われたようです。また、まじないに使われたと考えられる出土品に墨書土器^{ぼくしょどき}があります。秋田城跡などの律令国家の施設から見つかる墨書土器は数が多く、墨書は土器の使用者や使用場所を示すと推定される例が少なくありません。一方、米代川流域の集落跡から出土する墨書土器は僅かです。その墨書も文字そのものに何らかのまじないの意味があったようなのです。



▲釈迦内中台Ⅰ遺跡から見つかった墨書土器。漢字の「井」の字にも読めますが、悪霊を祓うためのまじないの記号だった可能性もあります。

おわりに

今回は、秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った遺跡を中心とした展示を通じて、米代川流域の古代社会を紹介してきました。米代川流域では、平安時代以降集落が定着し、水稻耕作や製鉄の技術などが律令国家側から導入され、流域の開発が進みます。竪穴建物の形式や土器の構成、少なくとも一部の墓や祭祀なども大きくは律令国家の文化の影響を受けたものです。これ以前の流域の詳しい状況は不明ですが、狩猟を主な生業として住居の痕跡が残り難い生活を営んでいた蝦夷の人たちが、これらの技術や文化を受け入れて流域の開発を進めたとすると、その社会背景や動機などを明らかにすることが重要な課題です。あるいは、流域で生活していた人たちが新たに移住し開発の中心となったのかもしれませんが。住居や墓、土器を始めとする出土品など、関係資料の詳しい検討を進め、開発の主体者や詳細な経過について考えていく必要があるでしょう。



展示遺跡と主な古代遺跡

○企画展開催に際しては、北秋田市教育委員会から多大な御協力をいただきました。

平成29年度 秋田県埋蔵文化財センター企画展Ⅱ期パンフレット

米代川流域の古代社会 ～集落・生業・墓と祭祀～

編集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地

電話：0187-69-3331 F A X：0187-69-3330

E-mail：maibun@pref.akita.lg.jp

ホームページ：http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun_hp/index2.htm

発行 平成29年9月